キブツの家庭生活 2

手塚信吉

日本の核家族問題とキブツ

私がはじめてキブツの家庭生活をみて、はっと脳裏にひらめいたことは、日本の核家族問題であった。「家付き、カー付き、婆あぬき」いやな風刺ではあるが、こんな願望は昔の花嫁さんにもあったであろう。いまは女性開放時代であるから表面化しただけである。

そんな願望から核家族時代となって、全国どこの町村でも、戸数増加して人口は激減している。そして公団住宅、都府県住宅、町村住宅、個人貸家と、年々数十万戸と、建っても建っても、住宅不足が解消しない。女性上位かウーマンリブか、国を挙げて若い女性の風潮に追従して、年々歳々巨億の国費を投じて、無定見無秩序に、買収し易いところから田畑を潰し、山をけずり谷を埋め、建築ブームに有頂天、それで儲けて笑いの止まらぬ土地屋と土建屋、一体これで日本はよいものであろうか。いやこんな核家族生活の流行が果たして女性の幸福につながるものであろうか。

旧態個人主義、個別対立社会体制の中で、木に竹をつぐような、核家族の理想が活かさ

れるであろうか。日本民族は永い歴史的伝統の中で、皇室を宗家とする「家中心」の社会であり、直系尊属卑属の拡大家族主義国であった。それがアメリカ占領軍下で、家族制度が変わり家督相続制が廃止になり、個人主義国家に変貌して家とは住家と観念が変わってしまった。

恋愛の終着駅が新婚家庭、他人の介入を好まない性生活、核家族が理想であろうが、現実と食いちがうのが浮世の常、新婚の夢も永続はしない。そして人間は誰でも生身の体、病気もすれば怪我もある。天災人災ところきらわずで、火災、水災、強窃盗、ゆすりたかりも、招かぬ客、一瞬の油断も一生の不幸につながる。子供が生まれたらまた一苦労、這っても立っても歩いても、いっときたりとも眼が放せない。厚生省の統計をみても、幼児事故は、新婚家庭が断然多い。だから老父母から離れた核家族生活は、今の日本の社会では考えものなのだ。不幸の実例を参考に供す。

例　1

AB二人は恋愛結婚、両親も理解して結婚式も披露宴も明治記念館で盛大に行った。新婚旅行は香港マカオ六日の旅、小宅ながらも新築家屋の二人暮らし、人も羨やむ楽しい毎日「私たち幸せね」と云い暮らしていたのも三ヶ月足らず。新郎は出社で昼はるす、新婦は一人淋しく留守居する。夕げの仕度に買物に出たが、台所口の戸締りを忘れて小一時間、帰ってみると、衣類も時計も月給袋の現金まで、そっくり盗難にあっていた。

盗まれた損失もさることながら、それからと云うものは昼の一人暮らしが恐ろしくて新婚気分どころではない。近所隣りの空巣ねらいや、押売りの噂話を耳にする度毎に戦々恐々生きたここちも無い思いであった。悪いことは重なるもので、風邪がもとで肋膜炎を併発し、体温三十八度を下らない。入院治療を考えたが、どこの病院でも保健のきく病床の空きがない。

一日三千円の看護婦を頼んだが、それは昼だけ、夜は新郎が毎日疲れた体で病妻の世話、ヘトヘトに疲れて核家族の甘夢も消えて困りはて、老母の助けを求める始末、六ヶ月後健康も回復したが、拡大家族に逆戻り、両親の家に同居して一家六人、二階の八畳一間に住んで安心立命、夫婦揃って外出も自由、つく〳〵昔の伝統を礼讃する二人になっている。

例　2

CD二人の新婚生活は公団住宅三DK、二人暮しの甘い夢も二年四ヶ月で終りをつげて、今度は親子三人、川と云う字に寝る喜びに変わってきた。だが若母の現実は生やさしいものではない。子守、洗濯、掃除、台所、幼児を背にした買出し等々、寝るひまもない忙しさ。三年後には二人になった。女中を雇いたくても金輪際ない。時々家政婦を雇うが、それは昼の手助けだけ。乳児を背にして三才児の手をひいて幼稚園通いをする姿、日本女子大出身の才媛も正に形なし、母性愛に引かれながらも、子を産んだことを後悔している。

そして未だ三十男の夫へのサービスを忘れた古女房、無事ですんだら不思議であろう。欲求不満と孤独感に耐えかねて、安レストランに立ち寄ったのが運のつき、度び重なって身を持ちくずし、一家不幸のドン底に泣く親子四人、個別対立社会の核家族生活これこそ世間によくある好見本であろう。

例　3

SN新夫婦は社内結婚である。新郎は電子工学の技師、新婦は秀れたタイピスト、

結婚後も二人揃って勤務していたが、妊娠中絶も二、三年でやめ、目出度く男子を出産した。当分という約束で、新婦の母親に来て貰い小供の世話を一任したが、老母と新妻とでは、育児の考え方がちがう。教育ママタイプの新妻には老母のやり方が一々気に入らない。

そんなことから結局老母を断わって家庭婦人に納まった。ところが子供の世話や家事雑用に忙殺されて、社会と没交渉な生活の空しさに耐えられない。さんざん苦悶の末に、託児設備のある会社に、高級タイピストとして、二度の勤めをすることになった。

毎朝八時に子供を連れて出勤する。託児所に預けて勤務をおわると、夕方連れてかえる。そんな生活が六ヶ月続いたが、気がついてみると、どうも子供が粗暴性になり、ひがみ根性も露骨になってきた。内秘に調べてみると、託児設備は許可基準のものであるが、保母が教養も愛情もない賃金労働者で子供を物品扱いにしている。吃驚して社を辞めてしまった。

さて子供の恩愛に引かれて、家庭に引きこもり、社会から絶縁生活を送るのが、淋しくたまらない。今更ながら母となったことが悔しい、優秀な名タイピストだけに一層たまらない。母として生き、社会人として生き、それが両立する生き方はないものかと、毎日考え苦しんでいる。

例　4

T君とE女も鉄鋼会社の社員であり、社内結婚である。E女は才媛の誉れもたかい有能経理女性、特に望まれて結婚後も二人揃って勤務していた。いつしか五年の歳月が流れ、愛子も二人、E女は家庭の母親になりきっていた。何不自由もない幸福家庭でもあった。だが寸前尺魔で一寸先もわからない。T君は交通事故で急逝してしまった。

賠償金もあり生活には困らないが、気をまぎらすためにも社会人となりたい。有能な経理女性だけに、公認会計士の助手としても、雇手はいくらでもあるが、子供を托す保育所がない。田舎の老父母を迎えるには、部屋がない。核家族住宅の悶えである。

例　5

農大を卒業したH君が、北海道の伯父の牧場に行ったのは、食料不足で大騒ぎの最中、昭和二十四年頃であった。病弱な伯父から牧場経営を引受けた時は、妻も娶って子供も二人になっていた。営々努力二十余年、乳牛三〇頭、内搾乳牛二〇頭になっていた。夫婦二人で眼のまわるほど忙しい。夏は臨時雇いの労務者を雇うが、大半は夫妻二人、子供は未だ長男が高等学校通学中であって役に立たない。

年中無休で、朝は四時起き、夜も搾乳を終わり飼料を与え入浴をすませ、晩食は八時か九時、分娩時になると徹夜が続く激務中の激務である。資産も可成りできた。だがH君は肝心なことを無視していた。

イ、金より命が大事であること

ロ、生きものを扱う畜産業は個人経営では冒険である。

過労と栄養失調は、病気の抵抗力がない。風邪でも休養のできない個人経営、H君はつい無理をして肺炎に悪化し、医師の診断を受けたときは、手おくれであった。わずか一週間の病床でポッコリ急逝してしまった。享年五十一才、忽ち一家は不幸のドン底に転落した。一人儲けを好む個人農業にはあまりに多い悲事である。

以上の五例は実話であり、核家族生活者の宿命でもある。だがキブツ社会を真似たら一

ぺんに解決する。人間は個々人は弱いもの、その弱い人間の最低単位の生活体が、拡大家族であった。それを解体して核家族化したことは、生活体の弱体化である。現在の社会では不利不都合不経済は当然である。理想の夢を追う新婚夫婦の大半は、早くて一年遅くても数年後には夢が破れて後悔している。

核家族生活とキブツ

先に述べたように、キブツ社会では夫婦単位の家庭生活であり、老父母といえども同居しない、完全な核家族生活である。それができるのは、協同体社会であり、分業が確立しているからである。日本の現状のような個人主義個別対立の社会では、拡大家族生活を解体して、核家族生活に入ることは、生活の弱体化であって、前記の五例のような、不利、不便不都合が必ず発生する。全国何百万戸の公営住宅でも、大半が核家族生活であるから、至るところ、反社会的、反家庭的な不幸に皆んな苦しんでいるであろう。

住宅不足という人道上の大義名分に囚われすぎて、二DKとか、三DKとか、核家族しか住めないような豆住宅を乱造して、全国町村どこに行っても、戸数増加して人口激減と云う、珍現象を生じ、民族的な伝統の美風であった拡大家族生活を打破し、血族愛を蝕み何の得るところがあろうか。一体この実情に対して政府も自治体も、無関心すぎるではなかろうか。

こんな核家族生活を奨励するような公営住宅を建設すればするほど、一千万老人から愛孫を奪って生きがいを失わせ、未来国家の主人公である少年少女たちから祖父母の恩愛を奪い、その上に民族伝統美俗の師を奪い、更に物価高騰の尻押しまでしていることになる。

核家族生活の流行は、時代の要求であってこれを阻止することは出来ないであろうが、今の日本の個人主義個別対立社会の中では核家族生活は、不利、不都合、不便、不幸を生じ、決して成果をあげることはできない。

巨費を投じた大規模な公団アパートの建設であるから、二百戸か三百戸単位の協同体生活集団用に建設し、中央センターを設けて、大食堂、配給所、娯楽所、診療所、老人ホーム、保育所、幼稚園等を備えたものにすれば、個別設備の無駄をはぶいて費用に大差はない。そして入居者は生活費が半減するばかりでなく保健、衛生、防犯、育児、養老等々計りしれない生活の安定と人生の安心が期待できる。そして一定条件下で入居希望者を募集すれば応募者は殺到するであろう。

この施設と実績を示しながら協同体思想の普及に努力、順次改善してゆけば、社会生活の健全化に大きく役立つであろう。

女性解放問題とキブツ

文化の進歩発展に伴って、女性解放の問題は、増々やかましくなってきたが、甲論乙駁で決着のつくものでもない。私はキブツ社会をはじめてみたとき、女性解放の問題の終着駅を発見した思いであった。

人間社会は、幾万年の大昔から、男性は外敵に当たったり、生活物資の集収に専念した。女性は内を守り、子女の養育に当たってきた。この永い永い習慣が男女の体力差ともなり、体力即生活力であった昔から、必然的に男性中心の社会が生まれてきた。ところが文化が進み、人間は次第に体力よりも、智力が物を云うようになり、男女の別なく智力重点社会となり、男女同権、女性解放、ウーマンリブと女権拡張の時代となった自然の勢いである。

女性は柔和優美が尊重され、良縁を得て結婚し、家庭にあって内助の功、そんな良妻賢母に満足しておれば、それはそれで幸福であろうが、日本女性の大半はまだまだ男性依存に幸せを求め、婚期をあせる傾向もあり、それが核家族生活の流行ともなり、住宅不足に拍車をかけてもいるが、大勢は女性の社会進出の著しい時代となっている。

最近の女性就業統計によると、農漁村や個人商店の女性労務者を除いても、女性就職人口は一千五百万人を突破しており、特に既婚女性の就職者が激増している。これは女性の教育水準が向上し、智識婦人が増加し、家庭生活に満足できなくなって来た為であり、欧米各国の実情からみても、この傾向は今後ますます盛んになるであろう。

ところが今の日本には、これ等の既婚女性の社会進出に必要な社会制度も施設も貧弱であり、前記五例のような核家族生活の不利、不便、不幸を必ず生じてくる。

それでは制度や施設が完備すれば、問題は解決するかと云えば否である。福祉施設も社会制度も至れり尽せりの北欧三国でも、前記五例のような問題が続出している。さて、どうすれば問題が解決するか。答は簡単である。五〇戸でも百戸でも協同体生活をすればよい即ちキブツ化すれば解決する。

今の時代に個人生活で「朝起きてみると風呂も沸いている。洗面所の湯も出る」「朝食も整っている」「四六時中家中が掃き清められている」「何時いってもキレイな両便所」「庭には四季それぞれの花がある」「衣類の手入れも洗濯も行き届いている」これだけにして置くには一日何千円の費用がかかろう。いや金をいくら出しても心は買えない。一パイの番茶にも芳味がなかろう。

ところがキブツのような、協同体生活では一月に一度か二度の当番はあるが、あとは太平楽である。いつも云うようにキブツ社会は自由平等、無搾取、皆労働、分業が確立しており、男女共に一日八時間一週六日は誰でも働くが、あとの十六時間は全くの自由時間で掃除も洗濯も台所も子供の世話も、何一ツする必要がない。それは当番係がやる。正に男女同権、女性解放、ウーマリンブもいっぺんに解決してしまうのがキブツ生活である。

今の日本の個人主義、個別対立の社会では女性解放を叫んでみても、天にツバする愚に等しい。家付き、カー付き、婆あぬき、そんな核家族生活の理想の夢を、現実化す唯一の活路は協同体（キブツ）化あるのみ。